人間観察のぶるーす

雪芳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
人間観察のぶるーす

【Ｎコード】
Ｎ２８７１Ｊ

【作者名】
雪芳

【あらすじ】
人間観察が趣味な主人公は、電車に乗っていて……。

めまぐるしく回る日常を、人間観察で過ごすのは、別に俺が暗いからじゃない。

ＪＲのとある始発電車に乗り込んで、がらがらの席に座り込んで、窓から乱暴に侵入してくる早めの朝の匂いばかり嗅いでいる。俺の短めの黒髪がさらさら揺れた。

本日夜中、同棲中の彼女から受けた一撃が、未だに俺の右頬に電流を流している。

どうしようもないじゃないか、真夏の太陽の下にいると、何故かグラマラスな女の子に目が言ってしまうのは。だってこう、腰とかクネクネ、誘ってるんだ。

男ってやつは基本的に永遠の愛なんて信じちゃあいない。本能の思うが侭、愚かな生き物なのだ。それを受け入れ、可愛い！　くらいの台詞を吐けるようじゃないと、恋なんかやってられないんだぞ。

俺は窓の向こうに浮かぶ流離い人のような雲に相槌を求めるように、欠伸した。

丁度そんな時。

隣の車両から、ゆらゆらと幽霊のように揺れながら、一人の女の子がやってきた。女の子はなんだか、何もかも重いんです、ってか人生が重いんですって感じに見えた。

空気も、服も、重力も。
鞄に至っては、地球でも持ってるんですか、お嬢さ～んって突っ込みたくなっちゃうね。マジで。

今まで明るいのが取り柄な僕のお陰で青春ドラマの一こまのようだった室内が、冷たい熱を持ってしまって、いきなり葬式会場にでも変わってしまったかのようだ。
時空が違うっちゅー話だよね。

彼女は俺を横目に通りすぎ、俺の丁度斜め向かいに、幽霊らしからずドッカリと重力に任せて尻を置いた。そのままうつ向いて、今度はなんだか柳の木みたいだ。

何と無く、吸い込まれるように、でも凝視するのは失礼かと思い、無関心を装って窓に映る遠くの景色を見るような目線で、俺は彼女を見た。

酷く真っ白な女性だった。そう言えば、この子はいつもこの時間帯、電車に乗ってくる。毎日、早朝、次の駅まで。きっと彼女の帰宅時間なのだ。

帰宅、そう、いつも彼女はグッタリと疲れた様子で同じ車両、前から三両目に乗ってくる。
濃厚なお酒のにおいに、ほんの少し煙草臭くて、ちょいと派手な女の子。水商売かなんか、きっと夜のお仕事ってヤツをやってるんだろうな。

それにしても、今日のグッタリはいつもより酷いように思えた。重症だ。俺は更にボンヤリ目で観察しまくる。途端に俺は直感した。
きっと、仕事かなにか、失敗したんだ。そんでもってそれは、理

不尽なものだったんだ。それもデカイやつ。
彼女は泣いていた。悲しみだけじゃない、ほんの少しの怒りと、悔しさまで混ぜて。

なんだか、男に騙されて柳の下で恨み節にて泣いているおいらんの死霊みたいだ。まぁ、彼女は賢い女性だから、男との恋愛なんかで恨んだりしないだろう。だからやはり、仕事の…上司かな、客かな…。

彼女は泣く。
更に唸って泣く。
も～猛烈に泣く。
俺なんか見えてないみたい。正にＪＲは私のものって感じ。

わんわん泣いて、鼻水までたれてて。そうこうしている内に、隣の車両に座ってたんだろう、ホームレスが車両を挟むドアから彼女を怪訝そうに見始めた。
みんじゃねぇよ、馬鹿。

と、ホームレスに気付いたのか、彼女はフッ泣くのをやめてしまった。うつ向いて、平然と何でもなかったようにしてる。
さっきまでの自分を否定…いや、存在さえなかったかのように、すましている。

まだ、涙が紅潮する頬をつたうのに、まだ、唇と肺が痙攣しているのに、まだ何もかも重そうで、泣き足りなさそうなのに。
…バレバレなのにさ。

俺は堪らなくなって彼女へと近付いた。
斜め向かい、彼女の隣に移動して、彼女の瞳からボロボロと溢れ

て止まらぬその涙に、キスをした。ついでに、自慢のスマイルを彼女に向ける。

ハッとして、彼女が顔をあげた。視線が触れて、俺はクラクラした。彼女、すぐに微笑んだから。

「ありがとう、励まして…くれて…。」

ふいに、電車のスピードが緩んだ。どうやら、もう駅に着くようだ。

彼女が鞄を手に取り、肩にかける。今日もまた、彼女はこの駅で降りるんだ。

電車が停車すると、彼女はそのまま、背筋をしゃんとさせて立ち上がった。

少し人より濃いめの化粧は幾分くずれてしまって、全然綺麗じゃない。だけれど、清い朝日に洗われたプラットホームへのドアが開け放たれると、なんだか女神に見えた。

たぶん、戦いの女神。

「ばいばい、猫ちゃん」

去り際の彼女の声に、俺はニャア、と愛玩種特有の声色で一声こたえて、長めの尻尾を手の代わりに揺らした。

人間って、強いんだな。

めまぐるしく変わる日常を、人間観察で過ごすのは、別に俺が暗いからじゃない。

人間がまた今日を頑張れるように、ハートを少し癒す為だろう？

（後書き）

２００５年ごろ製作。
読めばピンとくるヒトもいらっしゃるかもしれませんが、ＢＵＭＰ
ＯＦ　ＣＨＩＣＫＥＮの影響を受けています。高校のときに友人
に勧められハマりました。インディーズのバンドからハマってたの
はバンプだけだなぁと思います。思えば青春でした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2871j/

人間観察のぶるーす

2011年1月26日02時03分発行